



研究ノート

ミシガン大学滞在寸記

齋藤 公 男*

はじめに

1979年夏より約1年間米国ミシガン大学に客員研究員として滞在する機会を得た。今日我々は米国と比較しても遜色がないばかりかむしろ上回っていると思える程の物質文明を享受し、日本と米国と表面的には同質の社会のようにも見える。しかし、今回の滞在中種々な機会に米国人の物の考え方や日常生活における価値基準の相違を直接体験でき、大学での研究生活とともに私にとって貴重な体験だった。もとより文才もなく、短い滞在期間だったので必ずしも当を得ていない部分もあると思われるが、請われるままに滞米生活の印象を少し記してみたい。

ミシガン大学

ミシガン大学は、デトロイト空港から西へ車で約40分の所にあるアンアーバ市に所在している。アンアーバはいわゆる大学町で大学構内と町がみごとに調和し、着いたばかりの頃は構内を散歩しているつもりだったのがいつの間にか町通りに出てしまうということをよく経験した。町の人口約10万人の $\frac{1}{3}$ 位は学生で構成されており、学生の少ない夏学期には町もとても静かになる。

大学の歴史は古く、中西部における文化・研究の中心たるべく1817年にデトロイトに創立され、その後1834年現在の所在地アンアーバにキャンパスを移した。聞くところによると、創立時より神学部を持たない総合大学として設立され、これは大学発祥の歴史を考えると大変画期的なことだったそうである。ミシガンの州都ランシングにミシガン州立大学があるので、この大学を私立大学と間違えておられる方が時々おられる。しかしこの大学も州立大学で、州政府

からの歳費の他に連邦政府からのものや寄付によってもまかなわれているようで寄贈者の名前を付けた建物もかなり見かける。また、州出身の子弟に対する授業料は他州出身者に比べてかなり減免される。

大学はセントラル、メディカル、ノースの3つのキャンパスより構成されている。セントラルキャンパスはダウンタウンにあり、新旧とり混ぜた建物はとても個性的で大きな樹木と芝生に囲まれゆったりと配置されている。樹木のほとんどが落葉樹なので冬には枝葉も枯れ、まわりは深い雪におおわれて温暖な所で育った私にはとてもさびしく感じられた。しかし、冬が終り春の訪れとともにキャンパスは正に緑一杯で、散歩する者の心をなごませてくれる。私には秋のキャンパスの光景も魅力的だった。10月頃になると黄色に変色した葉がひらひらとまるで雪のように落ちる様はとても美しく何枚も写真に収めたい衝動にかられた。セントラルキャンパスに隣接して医学部、付属病院を持つメディカルセンターがあり、更に車で10分位の所には新しく拡張されたノースキャンパスがある。ノースキャンパスには工学部やその実験設備の外、音楽学部、芸術学部があり、それに学生寮や宿舎が隣接している。建物はなだらかな丘に比較的低い階層のものが多く、囲りの広々とした芝生と良く調和している。私の過した造船造機学科も数年前よりこのキャンパスに移転した。これら3つのキャンパスと学生寮・宿舎の間には大学運営のバスが真夜中まで運行されている。セントラルキャンパスにある図書館で夜遅くまで勉強した学生もこのバスを利用して宿舎に帰ることができるよう配慮されている。

私がこの大学に来て特に印象的だったのは図書館・計算機が真夜中まで利用できることと、建物はもちろん構内の樹木や芝生までもとても

*齋藤公男 (Kimio SAITO), 大阪大学, 工学部, 造船学科, 講師, 工学博士, 造船学

良く管理されていることである。その経費が他人ごとながら気になった。大学は古くから外国人学生を受入れており、学内にはインターナショナルセンターが設けられ、外国から来た学生に対し勉学や生活に必要な情報はもちろんのこと家族のための語学研修やピクニック等も企画してくれる。その他特筆すべき大学の施設としては、町の総人口が収容できる程のフットボールスタジアムと立派な公会堂である。9月に入り秋学期の到来とともにアメリカンフットボールが始まる。ほぼ同じ頃公会堂では音楽会が数多く催され、町はフットボールの熱気とともに芸術的雰囲気になりあふれ、学生や町の人々のみならず他から訪れた者をも楽しませてくれる。

研究上のこと

日本と米国の大学における教育・研究体制の差異については、既に多くの著書があり本誌でも紹介されているのでここでは割愛するが、それらを直接見聞できたのは大変興味深かった。私の専門の造船の分野に限ってみても研究環境が日本と米国とで随分違っている。まず第一に、米国ではセントローレンスより五大湖に至る水路が米国経済にとって重要な輸送路である。従ってこれらに関する研究が盛んに行われている。例えば、狭水路での船に働く流体力の問題、狭水路における操縦性の問題や輸送量の経済予測に関する問題等である。また、五大湖を航行する鉱石・穀物運搬船は長さが長く、かつ吃水に比べ船幅が広いので船の固有振動数が低くなり、通常の大洋航行船では余り問題にならないような高次同調振動が波によって誘起される。滞在中読んだ新聞記事によると、米国は最近のエネルギー危機を未だ埋蔵量の豊富な石炭によってもカバーすべく、それらを内陸部より鉄道・五大湖を利用してデトロイト等の工業地帯に輸送する計画があるという。第二に、米国には日本のような商船建造用の大造船所はほとんどないが、海軍艦船用の造船所及び多くの

優れた施設・研究者を持つ海軍研究所がある。この研究所は大学や他の研究機関で行われる種々の基礎的研究に対しても資金を援助し、米国における造船学の発展に貢献している。第三に、モータボートやヨットに代表される小型舟艇産業が盛んであると思う。日本でも近年愛好者が増えているようだが、米国ではシーズン中の週末ともなるとハイウェイではモータボートやヨットを曳引した車をよく見かけ、その愛好者の多いことが理解できる。

その他

滞在中、大学では同室の若い研究者と広い分野にわたって意見を交換し、またホームパーティにも数多く招かれ、米国人の物の考え方や生活態度を私なりに認識できた。日本ではホームパーティと言うと少し肩苦しく考えがちだが米国人にとってこれは重要な会話の場と考えられ、機会をとらえては友人・知人を自宅に招いたり自分が招かれたりする。この場合、日本では食事の内容に大変気を使うが、彼らはそれよりもむしろ会話の内容を重視しているように見受けられる。ワインを飲みながらさまざまな話題について友人との会話を夜遅くまで楽しむ。私はとても彼らと議論できる程の英会話能力を持っていないが、日本のこと、私の知っていることを片言の英語ながら夜の更けるのも忘れて話し合ったことは、今となってはとても楽しい思い出の一つである。

最初は大きな大学に戸惑いながらも慣れるに従ってそのすばらしい環境や施設を十分享受することができるようになり、また町の人々も大変友好的でそのお陰をもって一年間の滞在を楽ししい思い出を残して終えることができた。8月には、まるで故郷を離れるような気持で友人・知人との別れを惜しみつつ帰国の途についた。

おわりに、今回の米国滞在の機会を与えて下さったミシガン大学フランシス・オグルビー教授並びに大阪大学中村彰一教授、田中一朝教授に厚くお礼申し上げます。